

Title	横山重編「古浄瑠璃正本集」
Sub Title	Kojoruri-shohon-shu, edited by Shigeru Yokoyama.
Author	松本, 隆信(Matsumoto, Ryushin)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1966
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.22, (1966. 11) ,p.18- 22
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00220001-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

横山重編「古浄瑠璃正本集」

松 本 隆 信

戦前の昭和十四年・十六年に第一冊・第二冊が刊行された後、戦争によって中絶のやむなきに至った「古浄瑠璃正本集」が、同じ編者の手で、昭和三十八年から再刊の業が起され、四十一年一月の第五冊刊行を以て一応の完結を見た。本書以前に既に「神道集」「室町時代物語集」「説経節正本集」等を編纂され、古典の複製一筋に情熱を傾けてこられた横山氏が、戦後の長い空白の時期を隔てて、ここにまた「古浄瑠璃正本集」編纂の素志を遂げられた熱意と御努力に敬服すると共に、衷心からおよろこびを申し上げる次第である。

今度刊行せられた全五冊のうち、第一・二冊は戦前の旧版に増訂を加えたもので、第一冊には、元和・寛永・正保期の正本二六篇に附録として正本に拠ったと推定される写本等六篇を、また第二冊には、慶安・承応・明暦期の正本二四篇に、戦後新出の正本等二篇をそれぞれ増補された外、旧版になかった図版を添えられている。新刊の第三・四・五冊には、万治・寛文・延宝期を中心とする正本七四篇を、内容の上からおよそ類別して収録せられた。計一三二篇から成る、金平本を除いた古浄瑠璃作品の大部分を網羅する叢書である。

古浄瑠璃は、個々の作品の文学的価値は高く評価出来ないにせよ、中世から近世への文芸の流れの上に占める史的価値は無視し得な

い。「義経記」「曾我物語」「幸若舞曲」「室町物語」など、中世後期の新興民衆文芸の本流は、説経節、古浄瑠璃の中へ吸収せられていった。横山氏が「室町時代物語集」の編纂について、仮名草子を措いて説経節・古浄瑠璃へと向っていった進み方は、文学史の流れを正確に跡づけたものと言えよう。本書の完成によって、従来研究者が信頼して手にすることの出来る原資料の翻刻がごく限られ、本格的な研究を著しく遅らせていた、中世から近世への間の谷間の大きな部分が一挙に埋められたことは、学界にとっての大きなよるこびである。特にこの正本集の場合、散佚した戦前の資料と、戦後の新出資料との両方を併せて網羅し得ている点が、大きな強みであろう。本書の解題を読んでいると、戦後の時点における新しい企画では、到底これだけの充実した叢書は編纂し得ないことを、つくづくと感じさせられるのである。

古典の翻刻という仕事は、はたで見える程容易でないことは、その経験のある向きには、今更いうまでもないことである。原本の本文を一字の間違ひもなく活字に移すということ自体、大変神経の疲れる作業であるが、そこまでゆく前の準備がまたたやすいことではない。たった一つの作品でも、落ちのないように諸本を博搜し、その比較校勘を通して、採用すべき底本を選択するまでには、多大の労力と経費とを要する。これだけ多数の作品が、ただ手当り次第でなく、厳密な諸本調査の上で系統的に翻刻せられたこと、またそれが、幾多の協力者はあつたにせよ、個人の力によって成し遂げられたことは注目に価する。

古典の翻刻に際しての本文校訂には色々な方法が用いられる。写本にしても板本にしても、誤写や誤刻はつきものであるが、底本のそのような個所を別本によって補正し、新たな本文を作るといふ方法が戦前には多く行なわれ、今日でも純粹の学術資料としての外に、一般の読者を予想する場合には、そのような方法をとることがある。しかし、横山氏はその翻刻事業をはじめられた当初から、その方法を採らず、底本の忠実な複製を信条とされた。そして底本の本文の不備な個所については、傍注や解題において、参考となるべき別本の本文を最少限度に記述する方法を採られている。ただ氏の傍注のつけ方には、やや特徴がある。一例を挙げると、

みな一同にこゑをあけ、おめきさければけるは、これや此しやくそのごにうめつも、たゝかくやらんと、よそののたもともぬれ「よそのたもともぬれぬべし」

ぬ、二人のしやう人、いよく思ひはまされとも……(第一冊、古活字版「しんらんき」一六四頁。傍注は寛文三年板「しんらん

き」)

の如くであるが、もしこの場合、古活字版と寛文三年板との相違を正確に示そうとすれば、

よその・たもともぬれぬべし

よその・たもともぬれぬべし

といった形式が考えられる。つまり横山氏の方法では、「よそのたもともぬれぬべし」という傍注が、底本の本文のどこからどこ迄に当るのかが明示されない訳である。しかし、氏が後者の如き校注の形式を避けたのは、底本の本文の面目をそこなうことを嫌ったのと、氏にあっては、傍注はどこまでも底本の意の通らない個所の参考として記すためであって、決して異本との校異を示す目的ではなかったからであろうと思われる。氏は、校異によって本文を示すべき価値を有する異本は、出来るだけ底本とは別個に掲出すべきであるという考えをもたれているようである。近頃は種々の古典の校本の作製が盛んになってきているが、だん／＼精密さは加わる反面、形式が著しく繁雑になってくる傾向がある。もちろんその方法は、作品の性質によって、一概にどれが良いとは言えないが、中世から近世初期へかけての新興文芸における場合の如く、諸本の間の本文の動き方が、単純な書承伝承の上での変化に限られない作品を対象とする場合にあっては、氏の探られている態度は妥当であろうと考えられる。

翻刻の形式についてなお細かなことを言うと、氏の翻刻には、私に施した句点や改行が、一般の翻刻よりもきわだつて多いことが目につく。これは原本の面目をできるだけ保存しようとする方針と矛盾する如くであるが、氏の施す句点や改行は、漢字を交えることの極めて少ない仮名文を読み易くするための便宜という意味しかもっていないところに、普通の句読点とはやや違った性質がある。氏の用いる句点は、点のみで、。点は一切使わない。これは、板本では。点を句点として普通使っているので、原本の句点と区別する意味もある。また、翻刻本の版面で、各行の一番終りの字の次に句点を必要とする場合にも、それを施していない。これは、行が変ることによって、句点がなくとも視覚の上に同じ効果を及ぼすことが出来るからである。つまり氏の場合の句点は、今日における普通の文章として体裁を整えるという意味は全くない。いわば、本文に対する解釈作業としての役割をもつものであって、仮名を漢字に直し、底

本の仮名はルビとして残すといった方法に較べて、原本の本文の形態をそこなわず、誤りを少なくするという点においては、賢明な一つの方法である。

次に解題においては、横山氏の学風の特徴が更にはっきりと現れている。本書に限らず、氏の解題は常にそうなのであるが、原本の形態に関する詳細な記述が中心をなしていることである。すなわち、各正本について、装幀、表紙、題簽、匡郭、内題、段数、刊記、板元、丁数、行数、字数、板心、挿絵、絵師等の項目を立てて、それぞれに綿密な説明がなされている。一般に翻刻に伴なう解題は作品の内容についての紹介や、研究的な記述、たとえばその作品の文学的価値とか文学史的位置づけとかいった点についての解説に力を注ぐ割に、原本そのものについての説明がなおざりにされる傾向がある。解題を読んでも、底本の書形や書写、刊行の年代が明らかに分らないといった例を時に見受けるのである。研究的解説をつけることは、勿論大きな意味があるが、研究者を対象として、学術的資料を提供する目的においては、何よりも原本の姿を研究者の目の前に浮び上がらせるような説明が望まれることは言うまでもない。横山氏が翻刻の仕事を始められた当初から、こうした研究者を対象とする立場に徹した、客観的な解題のスタイルを確立したことは高く評価すべきであろう。

古浄瑠璃の正本はほとんど全部が板本であるが、本書の解題は前述のように、各正本の板式を極めて詳細に記述しており、特に従来国文学者の間では研究があまり進んでいなかった挿絵についても、かなり綿密な考察が行なわれている。それによって、無刊記本の刊年推定に客観的な裏づけがなされ得ている点は注目すべきである。また、これだけ多数の正本の板式解説と、豊富な図版とを併せる時、江戸時代前期における上方と江戸との出版界の状況を窺う上にも、貴重な資料を多く提供し得ていることも見逃すことが出来ない。

その外、正本に関連して、正本の所属太夫の伝記や、その他の諸問題に触れている所がある。前者では、左内と若狭守藤原吉次・伊勢嶋宮内・江戸あふみ太夫・さつま太夫・井上大和掾・虎屋喜太夫・山城掾等についての解説、後者では、「旧刻浄瑠璃本外題目録」・親鸞に関する浄瑠璃等の禁止事件の資料としての粟津家文書・「ともなか」「あくちの判官」「こ大ぶ」に見られる古筆の書き入れ・正

本「やしま」の原形・「にちれんき」と「日蓮大聖人註画讃」との関係・写本の正本・「川弥」といふ黒印記・「大友のまとり」の古い正本等についての記事が、その主なものである。これらの中に挙げられている幾多の当時の原資料は、今後の古浄瑠璃研究に益する所が多いであろう。なお左内の伝記については、第二冊に安田富貴子氏の「天下一若狭守藤原吉次」と題する論文が附載せられ、左内と若狭守藤原吉次とを同一人とする横山氏の仮説が、新資料「隔笈記」等によって実証されている。

ところで、右の如き諸点についての横山氏の記述は、内容は極めて実証的な研究でありながら、氏独特の銜わない随筆風の文章で綴られていて、読物としても実に面白いのが不思議である。どこまでも客観的な態度の要求される書誌学的研究は、とかく叙述が無味に陥りがちなのであるが、本書を見ると、氏の古書への愛情と、長年に亘る経験によって培われた鋭敏な感覚とが、それに尽き難い滋味を添えていることに驚かされるのである。

(昭和三九年三月—四一年一月、角川書店刊、A5判全五冊、各冊四、〇〇〇円)